

〔論文〕

生命についての神学的理解の一試論

上 沼 昌 雄

序

生命は、それが生きているということのゆえに、その理解に多様な要素を含んでいる。第一に、命をもって生きている物質としての生物学的な面がある。そして、生きているものが一つの共同体として身につけている特殊性や組織や慣習を調べる人類学的あるいは社会学的な面がある。さらに、生きているものがその肉体に受ける痛みや苦しみや死を通して、生命存在の意味や、死後の世界、あるいは意識を超えた超自然の世界を探究していく哲学的、宗教学的な面もある。

それぞれの面においては、細部にわたっての研究と探究と思索の努力がなされている。生物学的な面では、細胞の組織と機能を調べる分子生物学的研究と、遺伝子の研究から生命の本質に至ろうとする研究がなされている。人類学的・社会的な面においては、生命体の維持に関わる結婚と家庭のことから、一民族の特異性の研究もなされてい

る。宗教学的な面においては、生命存在の意味の現われとしての宗教儀式の研究から、霊の領域までの研究がなされている。生きているものあり方を支えている要素は、多岐にわたり、多様な面をもっている。

この論文は、このような生命についてどのような神学的な理解が成り立つのかを探る一つの試論である。生命についての神学的な考察は、今も生きている生命を対象としていたのであって、超自然的な生命体というものを想定しているのではないし、今生きている生命体を神的なものに転化させて、そこに神学的意味を付け加えていくというものでもない。生命は、生きているすべてのものと連続性をもっている。それゆえに生命についての神学的考察には、他の生物学や人類学や社会学や精神科学などの考察との連続性がある。

しかし、神学的考察は生命を神のわざと意図のなかでとらえていく作業であるので、他の考察とは全く結びつかないところもある。この論文は、生命理解について他の考察との連続性と非連続性とをふまえて、神学的理解の枠組を設定していくための一つの試論である。その素材として、初代教会と東洋の生命観と現代科学をもちいていくものとする。

一、グノーシスの生命理解

使徒パウロは、テモテに宛てた手紙のなかで、キリストによって「いのち」(ζωή)と「不滅」(ἀθάνατος)とが示されたといっている(Ⅱテモテ一10)。いのちのあり方をキリストのうちに、特にその復活のうちにみている。それは、「死の滅び」であり、「不滅」である。いのちをキリストに直接的に結びつける考え方は、キリスト自身の言葉、すなわち、「自分自身が「道」であり、「真理」であり、「いのち」である」という言及に拠っているといえる(ヨハ

ネ一四6)。

いのちをキリストと結びつけて理解していくことは、直接的に神学的な作業であり、生命理解の神学的枠組を定めることになる。特にパウロの提示は、いのちの理解に関して、キリストをぬきにして、しかもキリストに代わるものが存在すると思われていたなかでなされたのである。「まことのいのち」(エテモテ六19)と声明しなければならぬ状況が起ってきていたのである。その背後には、キリストの復活を否定しても(Ⅱテモテ二18)、いのちの理解に関して、「まことのいのち」を獲得できるといふ教えができたからである。それは、「果てしない空想話」(Ⅰテモテ一4、Ⅱテモテ四4)、「系図」(Ⅰテモテ一4)、「愚かで無知な思弁」(Ⅱテモテ二23)、「ことばについての論争」(Ⅱテモテ二14)、「俗悪なむだ話」(Ⅰテモテ六20、Ⅱテモテ二16)と呼ばれている。それを思想的な表現で言われているとき、「靈知」(グノーシス)(Ⅰテモテ六20)と呼ばれるものである。

キリストによるいのちの理解が、そのはじめからグノーシスのな理解との対比のなかで問題とされているのである。ここで「グノーシス」といわれているものが、後代のグノーシス主義の初期の形態のものと理解することができ¹。最近の研究によって、歴史的な思想として体系づけられたグノーシス主義と、初期の一般的な宗教体験としてのグノーシス、すなわち、「靈知」と呼ばれる靈的認識とが区別されることが認められてきた。²

荒井献は、グノーシス主義の本質の形成に三つのモチーフがあるとみている。³第一は、人間の本来的自己は究極的な存在、すなわち至高者と本質において一つであるという救済の認識である。第二は、その前提としての反宇宙的二元論で、世界を物質ないし感覚的次元と、それを超えた精神的ないし靈的次元の二領域に分かつと同時に、後者により高い価値をおく世界観である。第三は、その結果として要請される本来的自己の啓示者または救済者で、この本来的自己と靈的体験の領域を発見し認識していく過程そのものが靈的認識と呼ばれるものである。第一のモチーフの素

材はプラトニズムにあり、第二と第三のモチーフの素材はユダヤ教にあり、のちにキリスト教との接触のなかでグノーシス主義として形成されていったとみている。

このような霊と肉との二元論のなかで肉の領域から霊の領域へ昇華していく過程は、仲介者を通してであっても、「霊知」と呼ばれる霊的認識によってなされるもので、広い意味でも認識する個人の体験のなかに納められるものを、登りつめるようにして至高者の認識に至るのである。この段階は「系図」と呼ばれるものになり、そのプロセスの説明は「空想話」ということになる。

しかし、肉の領域を脱却して霊の領域での救済を達成しようとするときに、肉の世界は悪の世界として否定されるのと同時に、肉のエロスの要素は肉の世界を脱却する手段として重視されているのである。生命の誕生と維持に関する生殖行為を極端に重視していくのである。「俗悪なむだ話」というものに陥ってしまう要素が含まれているのである。ただしこのエロスの要素の重視は、霊的認識の手段としての意味を有して、生命体そのものとしての重視と異なる。逆には、ギリシア思想に現われているように、生命の軽視に結びついているのである。プラトンは、『国家』において、生命の誕生と意味は国家というもう一つの目的のために制約されるべきものであると語っている。⁵ アリストテレスでは、魂が受胎のち肉体に入ったときにはじめて人と認められるのであって、プラト四〇日目、女子は八〇日目であって、それ以前の墮胎は殺人にはならないと考えられていた。⁶ 肉体を否定すると同時に、その肉体が霊の体現の場としての意味をもっており、肉をもったままで霊的な体現者と変えられていくところに救済の場を与えられるのである。そこに靈魂の不滅、不死という課題が出てくるのである。

パウロがキリストによって啓示されたいのちを不滅とし、そのいのちを与えた神を「滅びることなく」(Iテモテ

テ一17)、「ただひとり死のない方」(Iテモテ六16)としているのとは違っている。いわゆる霊的認識によって至高者の知識に至ったものは、そのまま永遠の世界に生きるものとみなされているのである。不死ということは、自己が本来的なあり方を実現していくときに霊的な認識として体験されていくものなのである。

グノーシスの救済が物質の世界から霊の世界への霊的認識によるものである。それはやはり人間の意識の働きによるものであることに相違はない。意識の働きのなかには無意識の領域に至るまでということが含まれている。⁷ それは、人間の認識能力が超自然的なことにまで関わっていることを示している。生きているものが霊的認識によって不滅と不死を自己のものにしている領域である。そこにいのちと救済をみている世界観であり、人間観である。それは、宗教一般に共通にみられる生命観に通じているものであり、それだけ普遍性をもっており、説得力をもっている。パウロがキリストのうちに、しかもその復活のうちに示されたいのちと不滅を強調しているときに、それは放っておいたならば組み込まれてしまう危険性をそこに感じていたからである。現実に「知性」(nous)が腐って信仰から離れてしまった人々のことを言及している(Iテモテ六5、IIテモテ三8)。キリストをぬきにして不死と救済を求める動きは一般的に現われていた現象であった。グノーシス主義の最近の研究で明らかになったことは、グノーシス主義がキリスト教の異端というよりも、キリスト教とは無関係に発生した別の宗教運動であって、その意味では異教といわれるものであるということである。荒井献もこのことを指摘して、その上でグノーシス主義の本質の起源は、インドのウパニシャト哲学から、インド・イラン思想、ペルシャのゾロアスター教、プラトニズムにまでみられるものであるといっている。⁸

パウロはキリストによって示されたいのちと不滅とを前面に出してきているのであるが、そのときにすでに、生命を物質的領域だけでなく、いつでも知識と瞑想によって生命の宇宙論的理解を試みている動きが一般的にあったので

ある。神学は、このような一般的な理解のなかで、キリストによるいのちと不滅の理解を明確にしていくことである。この一般的理解は、神学が形成されてきた西洋の思想だけでなく、神学の形成が問われている東洋においても基本的な生命観として受け継がれてきたのである。このことをグノーシス的な要素と共通な面をもっていると思われるインド・チベットの密教仏教のマンダラのなかにみることにする。

二、マンダラにおける生命観

マンダラ(曼荼羅)は、インドの密教仏教のなかで形成されてきたもので、生命体としての人間の肉体を出発点として、果しなく外に拡散していく精神の世界を象徴的に表現したものである。日本では八世紀に弘法大師空海によって中国から伝えられた。密教マンダラの特徴は、感覚の世界を認め、重視していることである。感覚の世界を切り捨てて精神の深みに至ろうとするものとは違って、感覚と感性を豊かに研ぎ澄ますことによって、肉体のあらゆる働きを通じて精神の深みに至ろうとするものである。それだけ人間の心の深層に焦点をあてていくものである。

マンダラのなかで、生命をもつものとしての人間の肉体が感じ、体験し、生得していくものを象徴化したものが胎蔵界マンダラと呼ばれるものである。さらに金剛界マンダラと両界マンダラと呼ばれるものがある。胎蔵界マンダラの胎のことであり、「蔵」は倉のことである。それは女性の子宮の内部で生命の種が宿り、育まれ、成長していく過程を描いたものである。また胎蔵の世界は、人間の意識の前段階である無意識のカオティックな根元的な世界から意識の世界へ成長していく過程を描いたものである。

胎蔵界マンダラが内に凝縮する世界であれば、金剛界マンダラは外に果てしなく拡散する世界であり、意識そのものの世界である。胎蔵界が女性的、母性的世界であるに対して金剛界は男性的・父性的世界である。金剛界は宇宙に通ずる壮大な摂理の世界で、人間の短い人生を超えた永遠の世界である。そこには壮大なスケールの宇宙性が盛り込まれている。

両界マンダラは、これら二つのものの統合された世界であり、無意識に対して意識、感性に対して理智、肉体に対して精神、女性に対して男性など、相対しながらの合一された世界のことである。生命体としての肉体を宇宙からさずけられたものと理解し、肉体から出て来る精神は宇宙を認識し、個を超え、全体を超え、さらに究極の世界に到達するものと考えられている。極微を究めていくと極大に通ずるのであり、また極大はあらゆる極微をも包みこむのである。この総体的な統合がほとけであり、「如来」であると考えられている。マンダラの最終的な認識目的は宇宙と人間の一元論的統合にあるといえる。

このように、人間をその生命体の物質的な現われとしての肉体の領域から宇宙までの拡大な世界観をとらえようとしているところにマンダラの特徴がある。この場合に禅の思想と違って、肉体による感覚の世界、ならびに生殖活動をもこの宇宙論のなかにとり入れている。マンダラのなかに男女の交合図というものがある¹⁰。即身成仏を説くこの世界では、生ま身のままの成仏の可能性を説いているのである。肉体をもつものの生命活動の全体を成仏に至る過程に入れるのである。マンダラの象徴的な表現のなかには、生命をもつものとしてのすべての活動、すなわち、生物学的な面も精神的な面も含まれているのである。

このような世界は、「感覚的な身体世界(エロス)と抽象的な宇宙世界(コスモス)」と「肉体的な自然学と精神的な形而上学¹¹」とが一体のものとなったところと理解されている。松岡正剛は、空海の世界がこの意味で「生命の海」

と呼ばれることに賛同している。¹² 中沢新一は、ソリッドなシステムと思われるマンダラの図像表現の背後に意識をめぐる流体的な思考がひかえているとみている。¹³

マンダラは、宇宙論に至る拡大な世界であるが、生物としての生命現象がそこに組み入れられていることが特徴である。そしてこの生命理解の無限の拡大の上に形而上学的な世界観が成り立っているのである。この意味では先にみたグノーシス的な世界観と共通するものがあるといえる。宗教的な生命理解として、共に生命現象との結びつきの上に宇宙論を築いているのである。生命の誕生と発達における無意識の世界を、コスモスに至る前段階として重視している。¹⁴

マンダラに代表されるような生命理解には、グノーシスの理解においてと同様に、キリスト教の生命理解が包み込まれ、隔合されてしまう危険がひそんでいる。生命現象の分析の拡大の上に成り立っている生命理解と世界観には、他のものが組み入れられてしまう力があるからである。キリストによるいのちと不滅の現われが世界の東西に伝えられていくときに、キリスト教の本質が骨ぬきにされてしまうような思想が定着していたのである。

三、現代科学における生命

キリストによるいのちと不滅の現われは、科学の進歩と技術の発展のなかで否定され、無視されてきた。それは神話であり、宗教的な出来事にしかすぎず、科学の時代に適合するように非神話化され、解釈し直されてはじめて意味のあるものとされてきた。啓蒙主義のなかでの近代科学の発達と、¹⁵ その上に神学の生き残りのために構成し直された

自由主義神学では、キリストによるいのちと不滅という概念は、宗教的な意味づけを与えるだけのものとして残されてきた。新正統主義神学は、この宗教的な意味づけだけを捉え直すために今世紀に入って出てきたキリスト教の宗教現象の一つとして理解することができる。¹⁶

この科学の発達を支えてきた基本的な考え方は、個としての主体が神に代って自己の前にある客体としての自然を、技術と計算によって支配していくという姿勢である。自然を計算可能な論理と定量化によって人間の理性の下に置くことを求めてきたのである。合理性の探究が科学の目的とされてきた。¹⁷ 科学は常に定量化されうる物質を対象としており、自然の素材としての物質の性質を明らかにすることを目的としてきた。

このような科学が生命の理解に応用され、今世紀に入って大きな成果をもたらしているのが分子生物学と呼ばれる学問である。これは、まず対象を分析して、その構成要素である種との分子を取り出し、生物的機能の担い手となっている分子に注目して、その構造や性質などを調べ、どのような理由によって生物の生命現象が出てくるのかを調べていくものである。この方法は、分析主義とか要素置元主義と呼ばれるものである。

a 科学の成果

生命科学が今世紀に多くの成果をもたらしたが、その中で遺伝子の構造の分析はその代表的なものの一つである。遺伝子がデオキシリボ核酸 (DNA) の二重らせん構造によって構成されているということが一九五三年に、ワトソンとクリックによって解明され、遺伝子の物質的構成や遺伝情報の伝達、制御の仕組みが解明されてきた。¹⁸ この解明と同時に、遺伝子を人間の目的のために用いていく技術も開発されてきた。二重らせんの解明から二〇年経って、一九七三年に、コーエンとボイヤーによって遺伝子の組換え技術が開発された。この技術の完成は、種や属の壁を越

えて新しい種の生物を作ったり、遺伝子操作によって人間の改良の道も開かれると言ひ広められたことで、当時の世界を靈感させたのである。

生命科学あるいは生命工学のもう一つの成果とされているのが体外受精である。これは、人工授精が男性の精子の問題のゆえの方法であるのに対して、女性の卵管の障害のために妊娠にいたらない不妊に対しての方法である。すなわち、卵巣から卵子を取り出し、体外で受精させ、子宮にもどすというものである。この方法による体外受精児の誕生は、一九七八年に英国で初めて成功し、日本では一九八三年に東北大学で初めて成功している。この技術の完成の背後には、遺伝子操作の技術の完成ということがあったのである。すなわち、遺伝子の操作による遺伝子の治療を受精卵が体外にある段階で行なうことが検討されていたのである。¹⁹

臓器移植のなかで心臓移植の技術の完成にともなう脳死の判定も、現代科学の成果の一つである。心臓移植は一九六七年に南アフリカ共和国でバーナード博士によって、日本では一九六八年に札幌医大によって初めて行なわれた。しかし脳死の判定は、ハーバード大学で一九六八年に出され、日本ではそれに基づいて一九七四年に日本脳波学会の基準として出されている。²⁰

b 現代科学の問題点

現代科学が生命に関する分析と技術の面でもたらした成果は大きなものである。しかし同時に、そこに新しい課題を引き起している。特に生命科学は、生命の生と死に関わることなので、人間の究極の問題に対しての問を引き起している。従来の科学の発展のなかで問われないうまままで来ていたので、より大きな課題となっているのである。体外受精が「医療行為」という名目で行なわれたとしても、受精卵を同時に人間が操作し、処理していくことが行

なわれている以上、受精卵をどのようにみるのかという問が残されている。生命の誕生のプロセスが解明されたとしても、その生命を人間が操作し、処理してしまっているのである。生命の誕生の意味はそこでは不問にされたままなのである。

遺伝子操作は、存在しているもののアイデンティティーに関わる問を引き起すものである。一九七三年に遺伝子の組換え技術が完成して以来、科学者の間で種を超える新しい生物、カメラのようなものの形成の可能性が問われてきた。しかしその後の研究で、DNAを組み換えただけでは新しい生物を造り出すことは不可能なことが明らかになってきた。科学による生命操作の前に、どうしても破ることのできない厚い壁が自然には厳然と存在しているのである。生物の種の保守性が明らかになったのである。岡田節人は、それを「自然そのものの中の論理」と²¹いっている。しかし、遺伝子の操作によって新しい生物を送り出すことができないという自然の摂理を知らされても既存のもの、の遺伝子进行操作して、その存在のあり様に変化をもたらす危険は現存している。存在そのものを問う存在論の問が残っているのである。

脳死による新しい死の判定は、死にともなう人間の思いや意味づけを無視してしまうところがあるので、一般的に受け入れられないという感情がともなっている。²²それ以上に、死の判定が現代科学によって明確にされても、死そのものの意味づけは不問にされたままなのである。生をもっているものが迎えないなら死の普遍性が、現代科学のなかで特殊化され、非現実化されているのである。死に至る機械的なメカニズムが解明されても、生を受けているものが負っている死の意味は不明のままである。

現代科学は、生命の物質的な構成と機能についての多くの解明をなし、巧妙な技術の完成をもたらしてきた。しかし、生命が誕生し、存在し、死を迎えることの意味については語られないままにきた。

この課題は、科学そのものがその発展の初めから内包していたものである。自然を定量化して、技術と計算で合理化し、処理してきたときに、取り扱っている対象そのものの存在理由や価値を問うことをしてこなかったのである。ヴィットゲンシュタインは、近世の啓蒙思想に基づく近代科学と哲学のなかでは、物とその総体が存在するというとはいうことができて、なんのために、またどのような価値をもって存在しているのかということについては沈黙は、論理の命題は同語及反復命題にすぎず、命題によっては世界の総体を語る主体と客体との二分化のなかでと価値は、世界の外にあって語ることはできないのである。「世界のいみは世界の外にあるに違いない。世界の意味は、すべてがあるがままにあり、すべてが生起するままに生起する。世界の中にはいかなる価値も存在しない」²³のである。このことのゆえに、倫理の命題は成り立ちえないのである。ヴィットゲンシュタインの結論は、「語るべきでないものごとについては、ひとは沈黙しなくてはならない」ということである。

・モノーはその著『偶然と必然』（一九七〇年）において現代人の魂の病いは、「自然は客観的であり、真の知識は論理と経験とを組織的に突きあわせて得られる、という思想」²⁵から生じていると述べている。科学は、価値の判断を行分がかつてそのなから偶然によって出現してきた（宇宙）という無関係な果てしない広がりの中で終わっている。「人間はついに、生きていくのを知っている。彼の運命も彼の義務もどこにも書かれていない。彼は独力で△王国▽と暗黒の奈落とのいずれかを選ばねばならない」²⁶

c 科学と宗教

現代科学の事象の数量的分析の積みかさねによって生じた問題に、科学者たちが気づいたときに、事物をその全体として把握し、事物の存在の目的や意味を捉える新しい枠組みを探り始めた。生命の理解においても、個々の要素としての細胞や器官や骨格の個々の研究だけでなく、それらの各要素が一つの生命体として機能を果たしていくときの全体としての生命体の理解の枠組みを探り求めてきたのである。科学の研究としてあくまでも事物を対象としていないが、数量的分析では得られない事柄を捉える枠組みが必要となったのである。科学の研究において新しいパラダイムが必要とされていることに気がついたのである。個と全体、事物と価値、存在と意味という物の両面の把握を試みてきているのである。このことは、科学と宗教という問を新たに提起してきているのである。

生命の把握をこのような全体性に立って新しい視点から捉えなおそうという試みが、生物物理学の間でなされてきている。近世以来の科学の枠組みを批判しながら、生きていくものとしての生命の全体像を捉える生命科学の可能性を求めてきている。清水博はその著『生命を捉えなおす』²⁷において、生命を「(生物的) 秩序を自己形成する能力である」²⁸とみることによって、生きていく生命の全体像を把握する試みを示している。生命のこの自己組織化には、多くの情報が一つの有機体のなかでその個体の生存の目的に従って、処理されていく幅と秩序とが内蔵されていると考えている。これを、「ゆらぎ」を許容する秩序をもったシステムであるといっている。原生生物においては、ゆらぎの幅のある運動のなかで、生存のためにより好ましいものを選択していく秩序が働いている。また、人間の頭脳も思考の振幅としてのゆらぎをもちながら創作という一つの調和をもった働きをしていくのである。ゆらぎという幅をもちながら、一つの生命体としての目的を達成していく能力をもっているのである。このことを、これまでの自然の材料（ハードウェア）の研究では得られなかった、自然の生きている仕組み（ソフトウェア）の研究であると呼んでい

清水博は、生物のこのような自己組織化の能力をとらえるために、個と全体との調和をもたらす生物の生きているシステムを捉えなおそうとしている。生命は、原子から始まって分子、高分子、細胞、組織、器官、個体としての有機体として現われ、個体は集団をもって社会、それから生きている地球にまでいたる、個と全体との調和のなかで有り立っているというのである。「多くの要素が集合して一つの糸をつくると、個々の要素には存在しない性質が出てきます。……生命は要素の性質ではなくて、系に新しく出現したグローバルな性質といふべきものでした³⁰」といっている。

しかし清水博はここで、この生命体としての人間と、人間を包含して全体として生きている自然との間に調和があるという考えが、東洋の思想、たとえば仏教とか特に禅の思想においてすぐに主張されてきたとみている。「仏教において驚嘆するのは、生きている自然の全体像がほとんど科学的に捉えられている点です。人間と自然とが動的に協力しあってより大きい系における秩序を形成している様子、そして、これより大きい秩序の形成の中で人間が存在を与えられている様子がはっきりと示されています。『仏の命を生きる』という言葉がそのことを的確に表わしています³¹。現代科学をそのまま認め、なおそれを一部として包含し、それを乗り越える思想として仏教を認めているのである。生命の現象をその全体で捉えなおそうとしたときに、仏教の助けをかりることによって、新しいパラダイムを探っているのである。

生きている生命をその全体像において捉えなおす作業は、生きている自然のミクロな世界を調べる分子生物学者や理論物理学者の間でもなされてきている。スタンフォード大学のカール・プリブラムは、脳神経の機能のなかに、感覚を通して入ってくる対象の二次元的な理解だけでなく、それを全体像としてとらえる能力、さらに意識の領域から無意識の領域に至るまで、また物の世界から霊の世界に至るまでを全体像としてとらえる機能に注目して、新しいパラダイムを打ち出す努力をしてきた。ロンドン大学のD・ボームは理論物理学の研究のなかで、宇宙のどんな相の物も、物でなく、一種の振動的なあるいはエネルギー的な表現として存在している状態のなかに、現象を超えている自然のこのころのようなものを認めているのである。ボームはそれを内蔵秩序と呼び、その包み込む運動と抜き出す運動とを基本的なあり方とみているのである。

プリブラムとボームは、それぞれの理論が互いに協力し合うかたちで、理論数学を駆使して、超自然を自然の一部として定着させる努力をしたのである。彼らの理論は次のようにまとめられている。「われわれの脳は或る数学にのっとり『具体的』実在を作り出すが、それは別の次元、すなわち時間・空間を超越しながら有意味でパターン化されている第一的な実在領界からの、振動数を解釈することによってなされる。脳は、ホログラフィック（完全写像法）的な宇宙を解釈するひとつのホログラム（完全写像記録）である³²。『見える世界は見えない世界からの作用を包み込み、抜き出すことによって秩序を得ていくのであるが、脳はその全体を写し出すことができるというのである。この全体像の把握は、東洋の哲学者たちが何世紀にわたって洞察を深めてきたものであり、共通点のあることを認めているのである³³。』

現代物理学と東洋思想の道教との深い結びつきを認めているのがフリッチョフ・カブラである。その著『タオ自然学』において、東洋の知恵と西洋の科学精神の本質的な調和の可能性を示しており、それによって科学に心をとり返すことができるとしたのである。デカルト的二元論によって分離された精神の世界をぬきにしては、現代物理学によって解明された原子の世界の働きとその意味をとらえることはできないと考えたのである。「物理学者は、神秘家のように、非感覚的なリアリティーの体験をし、体験からくるパラドックスにいやでも直面せざるを得なくなった³⁴。」そ

こから東洋の哲学との接点が始まったというのである。カプラは、陽と陰の両極が支え合って形成している一つのリズムをもった世界を、原子や分子の宇宙のコズミック・ダンスとみている。自然は固定したものでなく、常に変化し続けている。宇宙全体は、絶えず運動し、活動的であり、有機体的、精神的であり、しかも物質的なひとつの不可分なりアリティであると考えている。この考えが、物質と精神の基本的な合一性を宇宙の根本とみなす東洋の神秘思想に適っているというのである。

現代の科学が今までのこのパラダイムではとらえることのできなかつた領域を認め、しかもその領域からの関わりなしには自然の全体像を把握することは不可能であると知ったことは、世界と生命の存在と意味についての間を問いつけている学のあり方にとって注目すべきことである。科学が事物の数量的な分析だけでは学として完結したわけではなく、個々の事物や要素が関わっている全体との関わりを把握することによって、本来の科学の使命を果そうとしているのである。

しかし、この場合に、新しいパラダイムとして東洋の思想を取り入れようとする試みは、事物の全体をその初めから終りまでを含めて理解することにおいて適正であるということとはできないのである。なぜならば、それは科学が合理的な領域から神秘的な領域にまでその対象を拡大していることを意味しているだけだからである。意識の領域から無意識の領域にまでその対象を広げ、また物質の世界から霊の世界にまで、階層を登るように学的に探究を深めていっても、それは人間の理性と経験を抛り所としていることには変わりはないのである。現代科学が密教のマンダラの学による生命の理解か、マンダラによって描かれている神秘的な世界像と似てくるのである。科学者が物質の数量的な分析で得られなかつた全体像の世界を、宗教家の瞑想の世界によって補おうとしているのである。生命の生きてい

る姿にひそむ不思議な現象を深く探ることによってそこに神秘的なものをみとめる思想は、神秘主義的な宗教一般においてみられることであるが、この神秘的なものを神と同一視しているという点において、汎神論的な性格を有しているのである。

四、神学的理解の枠組

生きている生命の理解には、生きているその全体像の把握が必要である。しかし、そのために、生きている生命とそれを取り囲く自然とのなかで出てきたパラダイムでは、それは生命現象の延長線上に超越的なものを認める汎神論的な世界観で終わってしまうのである。汎神論的な神は常に内在的な神として作用しているのである。この意味での生命理解においては、生きているもののなかに秩序があり、調和があり、美が存在するということの説明は成り立つのである。ボームが「内蔵されている秩序」と呼んでいるものが出てくるのである。³⁵

生命や自然に秩序があり、調和があることの把握が汎神論的な説明によってなされたとしても、そのような秩序と調和をもつ生命や自然の存在の目的や意味についての理解には到らないのである。全体像というときには、そこに秩序と調和の把握だけでなく、存在の目的と意味をも理解するところの枠組が必要なのである。存在の目的と意味との把握は、ウィットゲンシュタインが指摘しているように外から与えられるものである。その目的と意味は、その存在の初めと終りについて現わされてくるものである。事の初めは、その目的であり、その存在の終りをも意味するものである。生きている生命は、その存在の初めから終りまでを通して、その存在の目的と意味を顕現していくものである。その存在の初めと終りを把握することによって、その目的をとらえていくことができるのである。この初めと終

りを与える創造主である神のなかにその存在の目的が隠されているのである。ここに生命についての神学的理解の必要性が出てくる。生きていることをどんなに延長し、深めていっても、生きていることの初めと終りをとらえることはできないのである。生命理解についての神学の営みは、生命の初めと終りが創造主である神のなかにあることを認め、神の創造のなかで与えられる生命の意味と目的とを明らかにしていくことである。

生命の初めと終りは神の創造のわざとその終末とのなかでとらえられてくるので、生命の理解は神のわざの全体の理解に関わっているのである。その意味で生命の理解は、神学の課題として与えられているのである。神学の課題として生命をとらえていく作業は、その全体像を把握する枠組を築いていくことである。³⁶ここでは生命の始まりと、その存在と終りの三つの面をもってその全体像の枠組とみることができるといえる。この三つの面は神の創造と終末のわざのなかで理解されるからである。この生命の三つの面には、生命倫理の諸々の課題が直接に関わってくるのである。生命のはじまりのことには、中絶と体外受精の問題が関わり、生命の存在のことには、遺伝子操作と臓器移植の問題が関わり、生命の終りのことには、脳死と安楽死の問題が関わっているのである。

a 生命のはじまり

「生きもの」(nepeš hayā)として表現されている生命をもつものは、動物にも人間にも使われている(創一20、21、27)。万物は神の創造によって与えられているのであるが(創一1)、特に動物と人間の場合に、「創造する」(bārā)という神の直接の創造のわざを示す言葉が用いられているのである(創一21、27)。動物と人間の食物として植物が神によって備えられ、動物と人間とが神の創造の秩序のなかで共存していくことが約束されている。動物も人間も生命をもつものとして神の創造のなかで尊ばれているのである。墮落後もその血を飲むことは許されてはいないのである(創九4)。「肉のいのちは血の中にある」(レビ一七11)といわれ、その血がいのちの贖いのために備えられているのである。キリストの血による永遠の墮いが完成するまでは、動物の血がイスラエルの罪のきよめのために毎年ささげられる必要があったのである(ヘルプ九13、14)。

人間の生命は、墮落後もそれが神の創造のわざによって与えられているものなので、「殺す」ことは許されなかった。「殺してならない」という戒めは、生命か神の創造によって与えられている事に基づいて出てきているのである。人間が神のかたちに造られているというのは、神の創造による被造の世界を神の創造の秩序によっておさめていく責任が与えられていることを意味している(創一28)。人間には精子も卵子も神の創造によって与えられているので、それらを神のみこころに従っておさめていくことが求められている。

創造のわざのなかには、生命の誕生と同時に、その生命が育っていくべき場としての家庭が神によって備えられていることを示している。すなわち、その家庭を築いていく夫婦の間のこととして生命の誕生を備えているのである。神の創造によって始まった生命が、家庭における夫婦の性の営みによってその誕生を与えられ、その家庭のなかで育てられていくものとされているのである。生命はこの家庭のなかでその誕生の意味を知らされていくものである。現代科学と技術による体外受精は、この家庭のあり方を崩壊させる危険をもっているものである。³⁷

b 生命の存在

生命の存在を自らの問としてその起原と意味を問題にするのは人間である。そこに哲学の課題としての存在論が問われ続けてきている。しかし、ヴィットゲンシュタインが指摘しているように、存在の意味と価値については、特に近世の哲学と科学のなかでは沈黙せざるを得ないのである。存在の意味はその始まりにおいて示されているのである

から、生命の存在の意味は、神の創造のなかに与えられているのである。ダビデは自分の存在の意味を母の胎の内での神の創造に見出し出していることを詩篇一三九篇で語っている。自分の存在の始まりの知識を神の創造の知識のなかで得ているのである。存在論と認識論の哲学の二つの課題が創造論のなかで解かれているのである。

墮落のときに、神がアダムに「あなたは、どこにいるのか」(創三9)と問うたときに、アダムは自分の存在についての知識を失なっていることを示している。モーセは、その中で「はい、ここにおります」(出エジプト三4)とすることができた。自分の存在を認め、受けとめることが神の前になされるときに、自分の存在の確信を得ることになるのである。

生命の存在の意味は、自分の生命を他の人に認められ、受け取られるということになって確認される。前に生命の成長の場としての家庭が神の創造によって備えられていることをみたが、生命は自分を受けとめてくれる家庭の中でその成長をとげていくものである。そのなかで他の生命の存在を認め、受けとめることを学んでいくものである。生命が誕生し、成長していく場としての家庭がキリストを通しての神のゆるしと愛によって築かれることが前提とされているのである(エペソ四32、五25)。

神の創造による生命の存在の知識は、自己のアイデンティティをもたらずものである。そのアイデンティティを崩す遺伝子の操作は創造の秩序をみだすことになるのである。臓器移植は広い意味をもってはいるが、このアイデンティティの問題には直接関わらないと考えられる。

C 生命の終り

生命の終りは罪の結果として全人類に入ってきている。そこに生命体の寿命、病気、痛み、苦しみ、死というテ-

マが関わっている。これらは生命をもつものが問う深い課題であるが、同時にそれぞれが神学の課題でもある。なぜなら、キリストの十字架の苦しみと死に関わる課題だからである。ヴィットゲンシュタインは、「死は生の出来事ではない。死をひとは体験しない³⁸」と述べている。死のテーマは、他のひとの死を通して課題となってくるのである。神学は、キリストの死を全人類の死とみることにあって死と死後の課題をキリストにおいて設立しているのである。それゆえに、キリストの受肉と十字架と復活は、肉の姿をもつものの神の下にある歩みを示しているのである。

受肉は、肉のもつ限界や弱さを身に負うことであり、死に定められている死をも受けることを意味している。その死に至る道においてキリストの苦しみと痛みは、肉をもつものすべての苦しみと痛みを負うものとして示されている。このようにして生命をもつものの救済のわざが、キリストを通してなされていることを示しているのである。救済はいわゆる霊的なことだけのこととして神学の課題として与えられているのではない。死は肉をもつものとしての死であることにより、全人類の課題なのである。プラトンは哲学を死の習練とみなし、東洋の宗教は死を瞑想することによって乗り越えようとした。生命の限界を知識や瞑想によって解決しようとしてきたのである。それは肉の問題を霊の領域で解決しようとする試みなのである。神学は、死を肉の死とみつけていることにより死の問題を取り扱っているのである³⁹。

神学においては死の解決は、死を死ぬことによって死に対する勝利を示したキリストの復活の教理においてなされているのである。死が肉の死であるのと同様に、復活もその肉においてなされるものである。復活のからだをもって生命のよみかえりを約束しているのである。この復活が万物の終りのときの約束として、万物の初めに対してその終りを設定しているのである。復活は、生命の起源が神のわざによってなされるのと同様に、神の直接のわざによって与えられている。死者の復活のわざは、生命を創造した神によってなされるものである。創造と終末は神のわざによって

示されることであり、生命の起源と終りもこの大きな枠組のなかでとらえられていくものである。

生命をそのはじまりと終りをもって捉えようとする神学の試みは、生命現象を拡大し延長して解釈することによって生命の諸層を全宇宙とみていくマンダラとは違う。また、生命の生物学的領域からいわゆる霊的領域にいたるまでをこの働きによって解釈して生命に一種の神秘的な意味づけをほどこしていくグノーシス主義とも異なっている。神学的試みは、生命の實在的現実を神の創造のわざにおくことによって、その生物学的な解明を受け入れつつ、その超越的な意味を認めようとするものである。マンダラやグノーシスにおいては死は、生命理解の一種の霊的解釈によって解決されるものとしているが、神学においては死を現実のこととして受けとめており、特にキリストの十字架のうちに、死を設定しているのである。死の解決を復活をもって現わすことによって、生命の終りも神の支配の下にあることを示しているのである。

現代の科学者のある人たちが東洋の宗教をもって生命や宇宙の全体像を捉えなおそうとしているが、その全体像も知識と瞑想によって生命現象を宇宙の解釈にまで拡大したものであって、生命とそのはじまりと終りをまったく捉え組のなかで捉えなおすことである。神学の課題としての生命の理解は、生命の起源と存在と終りとを神の創造と終末の枠組のなかで捉えなおすことである。

注

- 1 この箇所の説明についてカート・ルドルフの最近の研究を参照することである。Kurt Rudolph, *Gnosis trans*, ed. Robert M. Wilson. (Sanfrancisco: Harper & Row, 1983) p. 55f. ただしルドルフはこの書簡を「世紀初期のもの」としている。最近のグノーシス主義の研究の紹介は、雑誌『オメリオス』にエドウィン・ヤマウチが「つなわれし」。Edwin Yamauchi, "Pre-Christian Gnosticism, the New Testament and Dag Hammadi in recent debate" *Themelios* 10 (Sep. 1984): 22-27.
- 2 グノーシス主義の起源については荒井献の研究がある。『原始キリスト教とグノーシス主義』(岩波書店 一九七一年)。グノーシス主義の本質の形成の素材はプラトニズムとユダヤ教にあるとしている(三五五頁)。
- 3 前掲書 三四六―五〇頁。
- 4 湯浅泰雄はユングの深層心理学とグノーシス主義との親近性のなかでこのエロスの要素を指摘している。『ユングとキリスト教』(京都、人文書院 九九一年) 一五五、一七二、一七六頁。
- 5 プラトン『国家』5の9、プラトンは女は「二〇才から四〇才までの間に、男は「盛り」を過ぎてから五五才まで共に国のために子供を生むべきである」としている。「公共のための子づくりの禁をおかすようなことがあれば、その過ちは神の意にも人の正義にも反するものである」と考えていた。
- 6 アリストテレス *Historia Animalium* 7: 3 アリストテレスのこの考えは七〇人訳聖書に影響し「出エジプト記」二二章二二、二三節のギリシャ語訳に出ている。新改訳聖書で「殺傷事故がない場合」と「殺傷事故があれば」と訳されているところが、*ἐξαικονισμένην ψίκην, ἢ ἐξαικονισμένην ψυ* と訳されている。すなわち、魂が肉体に入ることによって形づくられているか、ないかという区別をもっているのだから、形づくられる前に墮胎しても殺したことはないというのである。
- 7 この意味で湯浅泰雄はユングとグノーシス主義との結びつきを前掲書において紹介している。またこのような理解は今世紀の実存主義的人間理解にも共通しており、ブルトマンの新約聖書理解の基盤にもなっている。
- 8 荒井献『前掲書』三四六頁。
- 9 マンダラの理解については、雑誌『理想』の五七三号(一九八一年二月号)の「マンダラ思想」でまとめられている。特に岩井實著「現代とマンダラ」に負うところが大きい。
- 10 鎌倉時代末期の立川派マンダラにみられる。

- 11 山折哲雄「密教における内臓認識」『現代思想―特集・密教』一一卷一九（一九八三年）一一五頁。
- 12 松岡正剛「空海の手紙」（東京、春秋社、一九八四年）一七頁。
- 13 中沢新一「雪片曲線論」（東京、青土社一九八五年）二六、二七頁。
- 14 ユングとマンダラとの結びつきについては、秋山さと子「ユングとまんだら」『理想』五七三（一九八一年）九七一―〇七頁を参照。
- 15 近世の科学と哲学の発展と問題点については、大村晴雄著『近世哲学』（東京、以文社、一九八〇年）に端的にまとめられている。
- 16 近世哲学と近代科学と神学との関わりについては、フランシス・シューファーが彼の三部作といわれている『理性からの逃走』、『そこに存在する神』、『神の沈黙？』においてまとめられている。
- 17 大村晴雄『前掲書』九五・九六頁を参照。彼は次のようにいっている。「はじめ『イタリヤ・ルネッサンス』の運動のなかで、『個体』として、個性的人間が生まれたときに、この人間は、最も直接に、神に対抗する人間であった。自らの存在についてすべての責任を負い、神に対しては、何もかも負わないことを確信するのである。この個性的人間が、それまでかれの背後に、一般者としてあった神を否定したとき、そして、自己自らの存在を主張したときに、かれが、自己の前に見出した新しい存在を、われわれは、一般に『自然』と呼ぶことができるのである。ガリレイに代表される近世初期の『新しい科学』の考案者たちによって把握し、自己に、全て隷属せしめなければならないのである。前章でのべたように、そこに、合理的な『計算』と『技術』とが考えられていた。その合理性を、限りなく、ますます高め、すべての存在に滲透せしめることに、この人間のいっさいがかけられていたのである。」
- 18 DNAの構造の発見の記録は、ジェームス・D・ワトソン自身によって記されている。『二重らせん』江上不二夫・中村桂子訳（東京・パシフィカ、一九八二年）。
- 19 この可能性が遺伝子の研究に関わる科学者によって真剣に考えられていたことがJ・グッドフィールドの『神を演ずる―遺伝子工学と生命の操作』中村桂子訳（東京・岩波書店、一九七九年）七九頁に論じられている。現在の体外受精の取り扱いに関して
- 20 『生命倫理に関する懇談』（東京・薬事日報社、一九八三年）の「資料編」一五四―五八頁を参照。
- 21 この基準の文章は『前掲書』の一五三頁を参照、この基準の見直しの検討が厚生省によってなされている。
- 22 岡田節人「生命科学の現場から」（東京、新潮社、一九八三年）一五三頁。
- 23 人類学者の青木保は、死にともなう記号化の意味について次のようにいっている。「脳死による死の判定は、何よりもこの『死のパーフォーマンス』を除いてしまうことになる。そこに物足らなく積然としな残る。文化的な記号を欠くことによる欠落感は深く大きい。死のパーフォーマンスを欠いては『死んでも死に切れない』のである」『朝日新聞』（一九八五年五月三日）日「葬式パーフォーマンス」。
- 24 ヴィットゲンシュタイン『論理哲学論考』（一九二二年）六・四一。
- 25 ジャック・モノー『偶然と必然』渡辺格、村上光彦訳（東京・みすず書房、一九八〇年）一九三頁。
- 26 前掲書、七。
- 27 清水博『生命を捉えなおす』（東京・中央公論社、一九七八年）、著者の思想は、「ホロンとしての人間」『マイクロコスモスへの挑戦』ヒューマンサイエンス第一巻（東京・中山書店、一九八四年）においても知ることができる。
- 28 清水博『生命を捉えなおす』九七頁。
- 29 前掲書、二二三頁参照。
- 30 前掲書、二四七頁。
- 31 前掲書、二五七頁。
- 32 K・ウィルバー『空像としての世界―ホログラフィーをパラダイムとして』井上忠訳、（東京、青土社、一九八五年）一八頁。
- 33 この理論の紹介としてK・ウィルバーによってまとめられている。
- 34 前掲書、一八〇頁参照。
- 35 フリッツォフ・カブラ『タオ自然学』吉福伸逸訳（東京・土作舎、一九七九年）六〇頁。
- ポームやプリブラムの思想が、N・ホワイトヘッドのプロセス哲学の流れのなかで考えられていることは、K・ウィルバーによ

- って指摘されている。『空像としての世界』三四頁。
- 36 創造論を福音主義神学の立場で捉えなおそうとしている試みとして、フランシス・シェーファーの *Genesis in Space and Time* (IV. Press, 1972) をあげることができる。
- 37 体外受精は現在日本では婚姻関係にある夫婦の間においてのみと明文化されているが、人工授精においてすでに夫婦間の枠を越える第三の精子が用いられてきたことを考えると体外授精においても夫婦間の枠組が崩される危険がある。欧米ではすでに借り腹や代理母ということがなされている。
- 38 ヴィットゲンシュタイン『前掲書』六・四三一一。
- 39 死を人が受けとめていくプロセスの研究は、E・キューブラー・ロスによってなされている。『死ぬ瞬間』川口正吉訳（東京、読売新聞社、一九七一年）。

追記 この論文の投稿ののち、論文で取り上げた、現代科学と東洋の宗教の結びつきと、それに基づいての新しいパラダイムを求め一連の動きについて、雑誌『理想』一九八五年九月号「特集―科学・非科学・反科学」、『朝日ジャーナル』一九八五年九月一三日号「教祖カプラー―ニューサイエンスを語る」、『朝日新聞』一九八五年九月二十七日夕刊「新しい科学の冒険」において紹介されていることを記しておきます。

（聖書宣教会講師・単立川越聖書教会牧師）